

小河滋次郎博士顕彰会について

柳沢英明(9 組)

65 期ホームページ(HP)に上原昇君(2 組)が民生委員について投稿するにあたり、小河滋次郎のことでやりとりをしました。その際、上原君から小河滋次郎や上田郷友会のことについて何か書いてと頼まれました。

折角の機会なので、小河滋次郎博士（以下博士）のことを同期の皆さんに紹介したいと思います。博士の顕彰については、顕彰会会長の横澤瑛さん（53 期）、前事務局長の市村光志さん（62 期）、副会長の関秀雄さん（67 期）といった上田高校同窓生が中心に先行して調査研究しており、こうした皆さんが平成 28 年の顕彰会設立をリードしてくれました。

その他に同期の神田愛子さん（10 組、現在『小河滋次郎物語』を執筆中）や二人の行刑官経験者もおり、監獄改良の顕彰を中心に活動してもらっています。

私は新型コロナウイルス禍が始まってから、上田郷友会の機関紙「上田郷友会月報」（明治 18 年 2 月 1 日より発行して現在まで続いている）の読み会を主宰していることもあり、顕彰会では末席を汚している存在でした。

それが、昨年 4 月より市村さんの後釜の顕彰会事務局長として、例会や活動の運営に携わっています。

特に会の情宣活動では、博士の業績や思想・信条を裏付ける資料（著書・論文、郷友会月報に投稿した記事、社会福祉学者による研究論文等々）を基に顕彰しておく必要があります。そのために、本腰を入れて、博士の月報記事関連を中心に目を通していますが、関係者の解説記事などにより博士の偉大さが迫真してきます。

ただ、明治・大正時代の擬古文（旧漢字・旧仮名による漢文調）は非常に難解で解読に時間がかかり苦戦しております。

博士の業績（監獄法制定、監獄改良、未成年囚の感化教育の導入と方面委員制度創設）の根底に流れるものが人権を根幹にした人道主義・博愛主義であり、藩閥体制下でも一貫して“弱き者の友として”の思想・信条を貫き通しました。道半ばで 62 年の生涯を終えましたが、博士の思いは日本の社会福祉事業の中を流れ続けています。

今年の 6 月に、博士に関する講演を二回（一回目は 30 分、二回目は 1 時間 30 分）させてもらい、準備に一月かかりましたが非常に勉強になりました。

現在は、上田市内に 17 ある地区民生児童委員協議会や小学校（上田の清明小学校と進め方を検討中です）などへ博士の紹介（売り込み）をしているところです。

以上

【写真 1：小河滋次郎博士：矯正図書館提供】



【写真 2：上田城址公園内の小河博士胸像と解説板：写真は中澤信敏様提供】

胸像左の解説板は平成 30 年（2018 年）9 月に顕彰会と上田市民生児童委員協議会によって建てられました。そこには、冒頭『博士は「弱き者の友たれ」を理念とする方面制度（現在の民生委員制度）の生みの親です』とあり、以下このように続きます。

『・・・1913（大正 2）年、小河博士は・・・大阪へ行き、救護事業研究会を立ち上げました。その頃日本は第一次世界大戦参戦のため物価が上昇し、・・・米騒動が勃発し全国で暴走がおきました。・・・林市蔵大阪府知事は、博士と協力して方面委員制度の設計・指導に当たり、・・・大阪府民の窮状を改善させていきました。こうして多くの人々が助かる方面委員制度が全国に広がったのです。戦後、方面委員制度は民生委員制度となり、現在は児童委員も兼ねています。』



(2022 年 7 月 30 日記)